

國學院大學學術情報リポジトリ

「満洲」で翻訳された宮沢賢治：訳者を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 『風の又三郎』, 「満州」, 翻訳, スパイ キーワード (En): 作成者: 母, 丹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000067

「満洲」で翻訳された宮沢賢治 —訳者を中心に—

Kenji Miyazawa translated in “Manchuria”:
Focusing on the translator

母 丹

キーワード：『風の又三郎』 「満洲」 翻訳 スパイ

Key Words: *Kaze no Matasaburo* “Manchuria” translation spy

要旨

1942年2月に、新京（現在の長春）の藝文書房によって宮沢賢治の童話、『風の又三郎』の最初の中国語訳——『風大哥』が出版された。この『風大哥』が作成された場所は、傀儡政権だった「満洲国」であり、日本側の文化統制とイデオロギー侵入が非常に強かったところである。しかし、その訳者と思われる、王恒仁という人は、国民党の地下黨員であり、つまり抗日者である。史料によると、王は当時スパイとして「満洲」協和会中央本部文化部に潜入しており、具体的な仕事は、雑誌『青少年指導者』及び『青年文化』の編輯者だった。『風大哥』という訳本の成立背景には、青少年に良き読み物を読ませる、また日本側の信頼を得る、といったスパイ王恒仁の意図が潜んでいると考えられる。

Abstract

In February 1942, the Yiwenshufang in Xinjing (Changchun) published the first Chinese translation of Kenji Miyazawa's fairy tale *Kaze no Matasaburo*, which named *Feng Dage*. The place where the *Feng Dage* was created was the puppet government “Manchuria”, where cultural control and ideological invasion on the Japan side were very strong. However, the person who seems to be the translator, Wang Hengren, is an underground member of the Kuomintang, that is, an anti-Japanese person. At that time, Wang had infiltrated the Cultural Department of the Central Headquarters of the “Manchuria” Kyowakai as a spy, and his specific job was as an editor of the magazines *Youth Leader* and *Youth Culture*. It is thought that behind the establishment of the translation of *Feng Dage* is Wang Hengren's intention to make young people read good reading materials and to gain the trust of the Japanese.

はじめに

戦時下における賢治作品の中国語訳の中で、1942年2月に、新京（現在の長春）の藝文書房によって出版された単行本『風大哥』（『風の又三郎』）は非常に重要である。しかし、残念なことに、この訳本の原本は入手不能の状況となっている⁽¹⁾ため、訳本そのものへの考察はできない。ただ訳者に注目することで、訳本の成立背景、特に翻訳動機に関わる事情をある程度推察することができる。

一、『風大哥』の概要

上述のように、季春明訳の『風大哥』の原本は現在確認できないが、それを少なくとも一時的に所持していた研究者がいる。児童文学研究者上笙一郎である。上笙一郎はこの『風大哥』について、短い文章「『風大哥』（宮沢賢治作 季春明訳）」⁽²⁾を残している。その文章から、『風大哥』の原本に関するわずかな情報が窺い知れる。まず表紙についてであるが、上笙一郎は図1のような写真を載せながら、「B6判で八十一ページという割合に小さな書物で、緑色表紙の中央に右横書きで大きく書名を書き、上部に風に枝をなびかせた老樹の絵をあしらっています」⁽³⁾と、説明を付けている。



『風大哥』表紙（藤島和画）

そのほか、挿絵、序文、本文冒頭部に関す

図1 『風大哥』の表紙

- (1) 『風大哥』は「日本の古本屋」にのみ在庫を確認できたが、77万円という高額である。
- (2) この文章によると、上笙一郎は兵庫県の古書店で『風大哥』を買ったのである。また、文章の末尾は、「昭和六十一年十一月号の『日本古書通信』が、「一人の著者の本 全部でいくら」という連載の第十一回目で賢治を取り上げ、『春と修羅』（大正十三年、関根書店）の時価八十万円、『注文の多い料理店』の時価八十五万円と書いていました。してみると、『風大哥』も似たような値段となりますか。その値でも欲しいという人があれば、さっさと手放して、新たな研究のための資料費に宛てるんですけどもね——」と冗談のように書かれているが、もしかすると現在「日本の古本屋」で販売されている『風大哥』は、上笙一郎が所持していたものかもしれない。
- (3) 上笙一郎. 児童文化書々游々. 出版ニュース社, 1988年7月, 第1版, p155.

る言及もある。

本文中にも二枚ほど挿絵があって、筆を執ったのは藤島昶という絵描き。扉を開くと「序文」があって、「這有端正の種子、等待着另個美麗的東西的萌芽……」とはじまっているのですが、読んでみますとこれは、『注文の多い料理店』（大正十三年・杜陵出版部）を出したとき賢治がみづから書いた広告文の一部分でした。冒頭のあの印象的な「どっどど どどうど どどうど どどうど」の歌、どんなふうに訳されているのかといいますと――

斗斗斗 斗斗斗 斗斗斗 斗斗。

吹飛甜的苹果。

吹飛酸的苹果。

斗斗斗 斗斗斗 斗斗斗 斗斗。⁽⁴⁾

「序文」における「這有端正の種子、等待着另個美麗的東西的萌芽……」は、『注文の多い料理店』広告文の一文「これは正しいものゝ種子を有し、その美しい発芽を待つものである」の訳文である。訳者がなぜそれを『風大哥』の序文に付したのかは不明であるが、『注文の多い料理店』広告文を読み、その一部分を訳したことは確実である。その訳文と冒頭部の「斗斗斗 斗斗斗 斗斗斗 斗斗…」に基づけば、季春明の訳文は言語面から見て正確だと言える。しかし、上笙一郎は後の文で「意味としてはそのとおり」だけれども「味気ない」という評価を下している。稿者もほぼ同意見である。

二、訳者「季春明」とは誰か

では、こうした訳文を残した季春明は、果たしてどういう人物だろうか。実は管見の限り、『風大哥』関連の先行文献において、訳者季春明は謎の人物として扱われており、関連情報は皆無である。しかし、大村次信の文章「満洲と宮沢賢治」には訳者に関する肝心な情報が書かれている。

(4) 注(3)に同じ。

私が満洲から引き揚げてもう三十年になる。その思い出の二、三。

(中略)

その二 『王恒仁と風の又三郎』

私と同僚の王恒仁は、旅順の工大を卒業した日本語の達者な通訳だった。彼は日本語の『風の又三郎』を読んでいたく感激し、早速満訳した。その時の手伝いは私だったが、出版は王一人でしたようなもので、皆から愛読されたことをおぼえている。その王恒仁が何の理由かはっきりしないが、ある日突然役所から憲兵に強制連行され、三日後には死んで戸板にのせられて帰って来た。(中略)王恒仁を始め、それをとりまく何人かの青年達は、当時、国造りに情熱をもやし、かつての日本の明治維新の志士にも似ていたと思う。もしも王君が存命していたら日中交友の役割に大きな橋渡しの礎となってくれたであろう。(5)

「満洲」が日本に占領されていた期間に、日本側は中華民族、およびその言語である中国語の存在を弱めるため、「満語」を「中国語」の代わりとして使っていた(6)。したがって、大村の言う「満訳」も「中国語訳」と理解して差し支えない。『偽満時期文学資料整理与研究』といった中国側の資料にも、『宮澤賢治研究資料集成』といった日本側の資料にも、1940年代に出版された『風の又三郎』の中国語訳は「季春明」の『風大哥』しか記録されていない。しかし、「皆から愛読された」王恒仁訳の『風の又三郎』も両国の研究者たちに無視されてしまうほど無名なものではないと判断できる。また、王恒仁と大村とは、新京(現在の長春)にある「満洲」協和会での同僚(7)であり、季春明訳『風大哥』の出版社芸文書房(8)の所在地も新京である。この流れで見ていくと、季春明訳の『風大哥』と王恒仁訳の『風の又三郎』とは、本当は同一のものなのではないだろうか。つまり、王恒仁が「季春明」という筆名を使い、『風の又三郎』を訳し出版したと考える。いずれにせよ、1940年代に王恒仁という人が『風の又三郎』を訳したのは疑うべくもない事

(5) 大村次信。満洲と宮沢賢治。啄木と賢治、5・6号。

(6) 劉曉麗。偽満時期文学資料整理与研究：研究卷・異態時空中的精神世界。北方文芸出版社、2017年1月、第1版、p3。

(7) 注(5)に同じ。

(8) 芸文書房の社長は作家古丁である。古丁は「満洲」の文壇を豊かにするため、世界文学における秀作を積極的に取り入れており、『風大哥』の出版を支えた原因もそれだと考えられる。

実であり、そのため、王恒仁がどういう人物なのかを知っておく必要はある。⁽⁹⁾

王恒仁(1918 - 1944)、別名王天穆。1936年、旅順の水師営公学堂を卒業し、大連商業学堂に進学した。1939年に大連商業学堂を卒業した後、「満洲」協和会中央本部文化部に就職した。彼の具体的な仕事は、最初のうちは協和会青少年団中央統監部文化部に管理される雑誌『青少年指導者』の編集であった。しかし『青少年指導者』が1942年7月に廃刊になり、その後王恒仁はほかの同人とともに、協和会改組に際して、新たに「満洲青少年文化社」を創設した。そのうえ王は自ら家財を売り、その金で雑誌『青年文化』を1943年8月に創刊した。『青少年指導者』の内容は残念ながら不明であるが、『青年文化』のほうは数冊確認することができた⁽¹⁰⁾。

『青年文化』は文学・哲学・科学・音楽・美術などで構成される総合雑誌である。ただし、その出版社「満洲青少年文化社」は協和会青少年団に依存しているため、「王道楽土」「五族協和」などを宣伝する文章も載せなければならない。全体から見てそうした文章がかなりの割合を占めた。それゆえ、上述の大村は王について、「国造りに情熱をもやし」「明治維新の志士にも似ていた」「日中交友の役割に大きな橋渡しの礎」といった印象を抱いていたわけである。

しかし、王恒仁の本当の身分は、協和会の従順な職員ではなく、国民党の地下党员だったのである。したがって『青年文化』も彼の働きにより、反抗の色を帯びる文章もわずかながら混じるものとなっていた。つまり、王は『青年文化』というメディアを、ひそかに反日宣伝の道具として利用したのである。さらに、王には李季風(筆名「季瘋」)という反日作家として活動する親友がいて、王が李の脱獄を手伝ったこともある。「季春明」という筆名はともするとその「季瘋」と関連しているのかもしれない。

ところが、『青年文化』に「協和」以外の文章を載せるには、協和会側の許可を得る必要があり、そのため王恒仁が斡旋しなければならない。まさにその斡旋の言動が警察側に不審がられ、王の地下党员の身分がついに発覚し、後に王は大村

(9) 王恒仁に関する全体的な紹介は、劉心皇『抗戦時期淪陷區地下文學』(正中書局、1985年5月)、高丕琨『偽満人物』(長春史志編輯部、1988年3月)、王勝利『大連近百年史人物』(遼寧人民出版社、1999年9月)、劉曉麗『偽満時期文學資料整理与研究: 研究卷・異態時空中的精神世界』(北方文艺出版社、2017年1月)、劉曉麗『偽満洲国時期《青年文化》雑誌考述』(上海師範大學學報、2006年7月)などによる。

(10) 『青年文化』の内容は中国の『全国報刊索引』というデータベースを通して一部閲覧できた。

が述べた通り、憲兵に捕まり殺されたのである。

「『満洲国』首都警察の文芸界偵諜活動報告」⁽¹¹⁾における王恒仁(王天穆) 関連の部分は、次の通りである。

(八) 協和会内ニ新設サレタル青年文化ノ動向ニ関スル件

本社ノ内容ニ関シ、総務部長王天穆ハ次ノ如キ言動ヲ洩セリ。

- 1、協和会ノ側面的文化机〔機〕(〔 〕ハ報告を転写した岡田英樹による、以下同) 関トシテ本年五月発足シタガ、本誌ノ特殊ナル性格ハ読者ニ愛好サレズ、現在三万部ノ内一部ヲ市場ニ、一部ヲ協〔和〕会支部ニ委嘱販売ヲシテ居ル状況デ、職員ノ俸給サエモ困ツテイル状況デアル。此レガタメ局面ノ打開策トシテ、資金ノ融通ヲ交渉スルト共ニ、多数ノ読者ヲ傘下ニ獲得ス可ク、「軟文学」、小品文等ヲ取入ルタメニ投稿者ヲ募集シテキルガ、応募者ハ極メテ尠イノデ善後策ヲ考究中デアル。
- 2、現在全滿青少年ノ読者〔書〕熱ハ、真ニ物凄イバカリデアルガ、之レニ対スルニ、積極的檢閲取締ハ、作者意中ノ作ヲ発表シ得ズ、誠ニ遺憾デアル。
- 3、学園ニ於テハ、現在総力結集ノ国家要請ヲ充スル為メ、各種ノ勤勞奉仕運動ガ展開サレテイルガ、此等ハ学園ノ指導方向ヲ誤ツテオリ、百害アツテ一利ナシデアル。

等ノ非協力的言辞ヲ洩セルガ、先ニ本社ニ於テハ、現滿映娛民處長タル姜学潜(華名姜興)アリ。此等徒輩ヲ以テ組織サレタル本社ノ性格、亦瞭然タルモノアルヲ以テ、引続調査中アリ。

上述のような言動に、協和会青少年団の性格・当時の検閲取締制度・勤勞奉仕運動を否定するという態度や、『青年文化』を協和会の統制から解放したいという意図があまりにも明白であり、警察側に疑われたことはいささかも不思議ではない。王恒仁のそうしたよく言えば大胆で、悪く言えば無謀な言動は、その若さ(王は当時25歳)が招いたものだろうか。大胆で無謀な王は無論自分の言動がす

(11) 岡田英樹。「満洲国」首都警察の文芸界偵諜活動報告。立命館言語文化研究6(2)。この極秘の資料は本来手書きのものであり、最初は台湾で発見された。複雑な経緯を経て、岡田がコピーのものを入手し、後にそれを活字化して『立命館言語文化研究』に発表したのである。

でに警察側に疑われていることを知るはずがなく、引き続き自分なりに努力し、『青年文化』にさらに数篇の異色な文章を載せたのである。無論これらの文章に含まれる反動的姿勢も後に警察に発覚し、王の死を加速させたのである。

三、『青年文化』における反日的要素

王恒仁は1943年8月から憲兵に捕まった1944年5月まで『青年文化』を主宰していたが、稿者が現在内容を確認できたのは『青年文化』の1943年10月から1944年1月にかけての4冊である。この4冊の中で、種々の反日的要素を結集したのは1943年10月号である。したがって本節では、1943年10月号を例として、『青年文化』に隠された反日的要素を把握しておきたい。

(一)、警察が発見した左翼作品

では最初に1943年10月号の目次を載せておく。

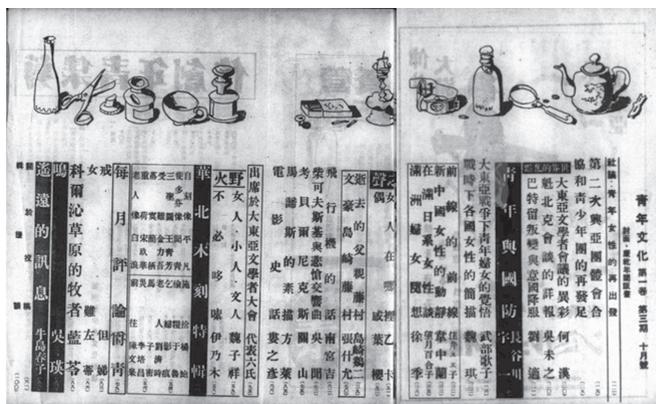


図2 『青年文化』1943年10月号 目次

『青年文化』は毎号青年に関する特定のテーマが設けられ、1943年10月号のテーマは「青年女性」である。上掲の目次の写真の真ん中あたりには、ページが折りたたまれたためか、少し見えない部分があるが、本文を確認するとそこは「女性之聲」というコラムに属する5篇の文章である。そうした女性関連の文章

は「協和」・世界情勢・科学・音楽・美術・文学といった主題を持つ文章と共に、この号を成したのである。

この号における異色な文章は3篇ある。3篇とも上述の「[満洲国]首都警察の芸文界偵諜活動報告」に記録されたものである。やや長いが引用しておく。

[Ⅲ、左翼作品の発見] (報告において、中国語で書かれた作品は報告者により日本語訳されているためそのまま引用する)

(中略)

毎月評論 爵青
青年文化十年十月号所載
原文(第八十一頁)

もし国境に就て強く自覚しなければ、文学製作と文学鑑賞は危険な遊戯になる危険性が多分にある。

分析

茲に所謂「国境」とは民族を指す。文学人として時に自己民族に対する思いを到[致]さなければ、結局創造した文学も危険な遊戯になるだらうと言つてゐる。

原文

私は決して日満華間の文学の会合若[しく]は交友は国境を消滅するの虞[慮]があると言つてゐるものではない。文学に於ける国際的交流の問題は内質的、根本的に正に慎重に考慮を加へ、極力之を[に]推進を加へなければならぬのである。吾人は豊富な日本文学を吸入することを必要とし、中国文学にならなければならぬこともある。然しもし国境の自覚がなければ一切のものは何れも功にならず、却つて徒勞に帰するかも知れぬのである。

故に吾人の深く反省しなければならぬことは「縦へ文学には国境がなくとも人には国境がある」と云ふことである。

分析

日満華間の文学の会合若[しく]は交友は決して民族の限界を消滅するものではない。必要なことは相互の借鏡であつて、各民族の文化防線の消滅することではない。即ち満系文学人に対して国際的文学工作に於て民族意識を失ふなど強調してゐる。

鳴 呉瑛

青年文化十年十月号所載

原文(第九十頁)

貴下は犬です。貴下は妾の所有の全部を略奪し、占據したの。貴下は又妾の肉体をも凌虐しようとしてゐます。貴下は貴下の慢性的殺人手段を以て妾を制[征]服し剝奪しようとする。妾にはもう何もなくなつた。妾には唯一の性命だけが残つた。妾はこの生命で貴下に抗争しよう。(中略)

分析

満系民衆が日本に剝奪されたことを暗示してゐる。

原文(第九一頁)

考へて御覧なさい。貴下は妾の弱い一部分の家族の財産をも窺はうとしてゐるではありませんか。貴下は考へなさい。貴下は分を過ぎた貪婪を満足させるためにかうも残酷でせう。貴下は妾の家族を滅ぼさうとしてゐる。(中略)

或る日貴下が妾の父と仲違ひをすると、貴下は直ぐ妾と妾の父の關係を断つて仕[舞]つた。貴下は妾と父の面会を禁じ、通信も禁じた。妾を妾の血族から切り離して仕舞つた。あゝ、これは一体如何なる世界であらう。

貴下に解りますか。否、きつと分らして見せる。何故に酔ひしれてゐるの。目を覚ましなさい。良人に反逆する妾の顔を御覧！狂つた瞳を御覧！粟立つ肌を御覧！妾の一切、一切を挙げて抗争しようとする妾を……」

分析

夫は日本、妾は満洲、父は中国を暗示してゐる。日本の飽くなき貪婪が満洲を占領し、更に中国を侵略して将に中国民族を滅亡せしめんとしてゐると云ふことを述べてゐる。

戒 但娣

青年文化十年十月号所載

原文(第八五頁)

恐ろしい災難に遭つた時は、勇敢に頑張らなければなりません。真理が必ずあります。何にも畏れることはない。生命を以て僕等を害さうとする一切の敵人に反抗しなければならぬのである。強く、自信を以[持つ]て……

さうすれば最後は必ず僕達のものです。不屈不撓の精神があつてこそ勝利は必ず僕等に來ます。どうして涙を流すのですか。僕等のやるべきことをやればよいではないのですか。」

彼の力の單つた言葉の一句一句が彼女の傷ついた心を打つた。(中略)その言葉は彼女の將に死せんとする意識を喚び返した。

青年は又言つた。

「僕達は皆責任があるのです……」

突如一つの広大な光明に満ちた聖なる路が彼女の目の前に展開した。

彼女は起上つた。彼女は恰も悪夢の中から目醒めた人の如く、生の焰が彼女の意識の中から燃え始めた。

分析

浪漫的色彩を通じて一つの革命的信念を表現したものである。

警察が分析した通り、上述の3例はそれぞれ民族意識への強調、侵略への糾弾、革命信念の表現という反抗精神を持っている。『青年文化』のほかの号における異色な文章⁽¹²⁾もほぼこの3種類に分類することができる。ところが、10月号における「異色」さは、実は文章にとどまらず、「華北木刻特輯」に収録された木刻⁽¹³⁾のほうが、文章より一層激しい表現力を以て、民衆たちの苦難と反抗意志を表しているのである。

(12) 「『満洲国』首都警察の文芸界偵諜活動報告」の〔Ⅲ、左翼作品の発見〕において、『青年文化』1943年8月号に掲載された2篇の文章も言及されたが、稿者は本文を確認できなかったため、引用しないことにした。

(13) 「木刻」は本来、民衆生活の諸相、社会の暗黒面の暴露、民族の自由、独立や抗日などを題材とする芸術形式である。瀧本弘之〔ほか〕著『中国抗日戦争時期新興版画史の研究』（研文出版、2007年8月）による。

(二)、「華北木刻特輯」における反日的要素



図3 「偷糧」

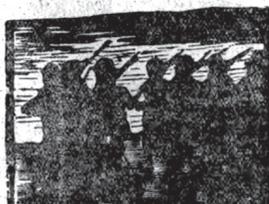
生き延びるために食べ物を盗むしかない民衆たち



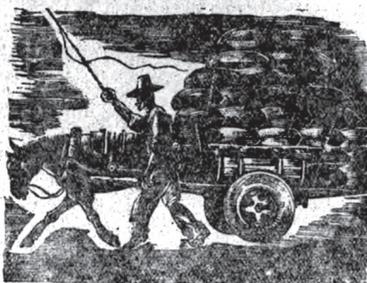
図4 「災」(空襲か)



← 乞婦 北京 彭嶺



← 前往 北京 陳文星



← 重荷 天津 宋致華

時濟 魯京 北人 塔 ↓



図5 「乞婦」「重荷」「老人」は民衆が経験する貧苦・圧迫などを表しているが、右上の「前往」は銃を担いでいる反日の兵士たちを描いていると見え、「意志」と「希望」を伝えていると考えられる。

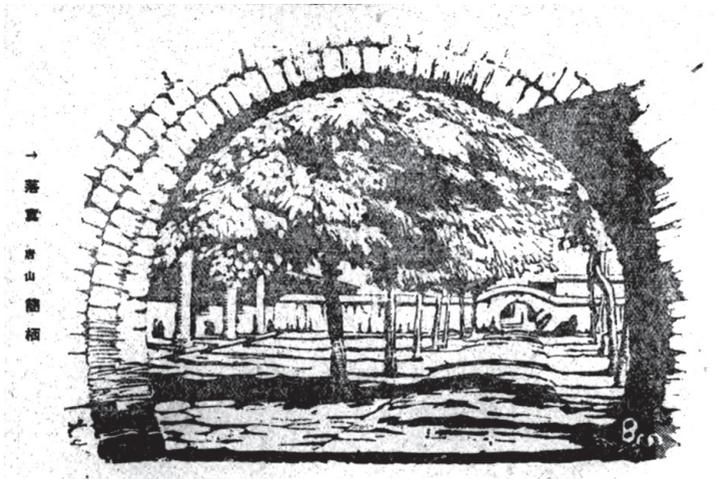


図6 「落寞」 描かれている対象は荒涼とした庭であるが、戦争のため荒涼になった中国の国土を暗示しているのではないかと考える。

四、『青年文化』における王恒仁執筆の文章

一方、『青年文化』には王恒仁自身による文章も掲載されている。稿者が現在内容を確認できたのは「記念未名先生」(1943年11月号)と「給本年度卒業的同學們」(1943年12月号)という2篇であり、著者名はそれぞれ「天穆」と「王天穆」である。さてこの2篇にはどんな内容が書かれているのか。

「記念未名先生」の対象人物「未名先生」とは、作家姜靈非のことである。姜はかつて『青年文化』の前身『新青年』⁽¹⁴⁾の編輯を担当したことがあり、そのため王恒仁と知り合っていた。王によると、姜は彼に『新青年』を託した際、いくつかの注意事項を言い聞かせたのである。その注意事項の1番目がかなり興味深いものであるため、以下に掲げておく。

原文：

一、既然是在這種企圖下辦雜誌，費了這麼大的心血，當然不能和普通雜誌同樣

(14)『新青年』→『青少年指導者』→『青年文化』という前後関係である。

的隨班唱彩，一定要保持着一個性格和一定的水準。

拙訳：

一、こういう企図の下で雑誌を經營するのなら、これほどの心血を注いだ以上、無論普通の雑誌のようにただ迎合するわけにはいかず、特定の性格と一定の水準を保たなければなりません。

「こういう企図」、「迎合」の対象とは何かがはっきりと書かれていないものの、両者を結び付けて読めば、おそらくその「企図」とは、前述したような、『青年文化』を協和会青少年団の統制から逃れた、自由度のある雑誌にすることではないか。第二節で引用した王恒仁の疑われた言動がまさにそのための斡旋であり、また『青年文化』の実際の誌面を見ると、その「企図」はある程度実現できたと言える。無論、そうした実現は結局王の死を招くことになった。

続いて「給本年度卒業の同學們」のほうを見てみよう。この文章は卒業生を対象としているため、「人生是希望的持續，人因爲有了希望，才有着生活的勇氣」（人生は希望の持続である。人間には希望があってこそ、生きる勇氣を持つことができる）といった励ましが主である。ただし、中には「異色」な部分も隠されている。

原文：

我國各個部門，都有優秀的日系指導者，隨時隨地我們都有和人家學習的機會，這實可以說，只有我國的青年，才能有這樣獨到的恩惠。

直至今日，我們還很少聽說滿系在各個部門的，出類拔萃的專門人才，這實可以說是我們的大恥辱。這個病根便是因爲我們沒有真正肯對於自己的職務，打盡精魂的人。所以，諸君雖然走出了學窗，但還要[一字空白]命的努力，對於你的專門，潛心致意，日夕研磋商，如此，不但是你自己的成功，也是大家的光榮，國家的福利。

拙訳：

我が国の各部門においても、優秀な日系指導者がいて、いつでもどこでも彼らに学ぶことができます。こうした独特な恵みは、我が国の青年にしかないと言えます。

各部門に満系の抜粋した専門的人材がいるとは、今日に至ってもあまり聞

いたがありません。これは実にわれらの大きな恥です。自分の責務のために精魂を尽くす人がいないのは原因です。だから、諸君はすでに学窓を巣立ちましたが、一生懸命に努力して、貴方の専門に心を傾注しなければなりません。そうすると、貴方自身が成功するだけでなく、みんなも光栄を感じ、国家も福祉を得ます。

上述引用文の最初の段落における「独特な恵み」は、表面からみれば「協和」に迎合するものであるが、本当は反語として使われたのではないか。つまり、自国の各部門の実権が日本人に握られていることは、「恵み」どころか、「災い」だと言いたかったのではないか。

次の段落における「大きな恥」は、「恵み」に含まれる「災い」の意味合いを裏付けていると考えられよう。しかし、その原因の一部は自分側にあることを王は確実に認識しており、卒業生たちに向かって、そうした「恥」をすすぎ、日本人から実権を奪い返すためには努力しなければならないと励ましているのである。

五、『風の又三郎』の成立背景

現在調べられる王恒仁関連の全ての情報は上で整理した通りである。それらの情報から、彼が持つ3つの身分—国民党の地下黨員・雑誌『青年文化』の主宰者・『風の又三郎』の記者—を確認することができる。また、実際の仕事の成果を見ると、彼はいずれの身分においても、確実に責任を果たしていたと評価することができよう。本節では、特に「記者」という身分に焦点をしぼり、「記者」とほかの両者とのつながりをもとに、本論の課題である、『風の又三郎』の成立背景を推定してみたい。

ではまず前掲の大村次信の文章「満洲と宮沢賢治」の中で、『風の又三郎』の翻訳及び中国語訳の出版に関する内容を今一度確認しておこう。大村は「彼は日本語の『風の又三郎』を読んでいたく感激し、早速満訳した。その時の手伝いは私だったが、出版は王一人でしたようなもので、皆から愛読されたことをおぼえている」と述べており、下線を引いた部分の情報から、『風の又三郎』の翻訳は王の所属した「満洲」協和会から課せられた「任務」ではなく、王の自発的行為だというべきだろう。つまり、『風の又三郎』を翻訳対象として選んだのは王恒仁本人だ

と考える。実は、『青年文化』における文学作品の掲載や、第二節で挙げた雑誌掲載内容に関する斡旋における「軟文学」、小品文等ヲ取入ルタメニ」といった発言からみても、「雑誌主宰者」としての王恒仁は本来文学に関心を持ち、作品の紹介にも力を入れていたことが伺える。そのうえ、王は協和会に就職してから、もっぱら青少年向けの雑誌の編集と発行などを担当してきた。そうした彼が、『風の又三郎』を青少年向けの良き読み物と判断し、自ら進んで翻訳したという可能性は十分あり得る。

しかし、王恒仁が畢竟国民党の地下黨員という裏面をも持っていたため、『風の又三郎』を翻訳した動機はそれほど単純なものではないかもしれない。第二節で述べたように、大村次信は惑わされて、王のことを「日中交友の役割に大きな橋渡しの礎」とまで信じ込んだのである。そうした誤解は、まさに王の狙いではないか。すると、地下黨員としての彼は、日本側のさらなる信頼を得るために、当時在満日本人の童心と郷愁を呼び返す大人気の『風の又三郎』⁽¹⁵⁾を翻訳した、という可能性も考えられる。

おわりに

これまで見て来た通り、王恒仁は普通の翻訳者と違い、政治的任務をも担っている人である。彼による翻訳の中には、その特殊な身分とつながる何かが反映されるに違いないだろう。それにもかかわらず、現在訳文本文を確認できないのは、非常に遺憾である。もし将来この訳本を入手する機会に恵まれたら、その本文を精読し、1940年代「満洲」における宮沢賢治受容の全体的状況を補完したいと考える。

〔付記〕本稿は2022年度中央高校基本科研業務費専項資金「《華文大阪毎日》雑誌研究一以翻訳文学選輯為中心」(項目番号:63232118)の研究成果の一部である。

(15) 日活映画『風の又三郎』は1940年11月23～29日、「満洲」で上映された。22日の『満洲日日新聞』に載せられた広告文は「不思議な東北地方の傳説！童心の夢とあこがれを描いて本年度最高の傑作！」とある。